

研究雑話 (157)

障害児教育・動作学誌上実習(75)

藤井力夫

姿勢反射の発達とリズム運動の習熟 (55)

／開け／、／開けば／、日本語・中母音・／え／列。

前回は、動詞活用での／お／列の発音が、／あ／列から生まれ、／あ／と／う／が縮合して／お：／となったこととお話しました。室町時代には確立し、「開かう」と書いて／

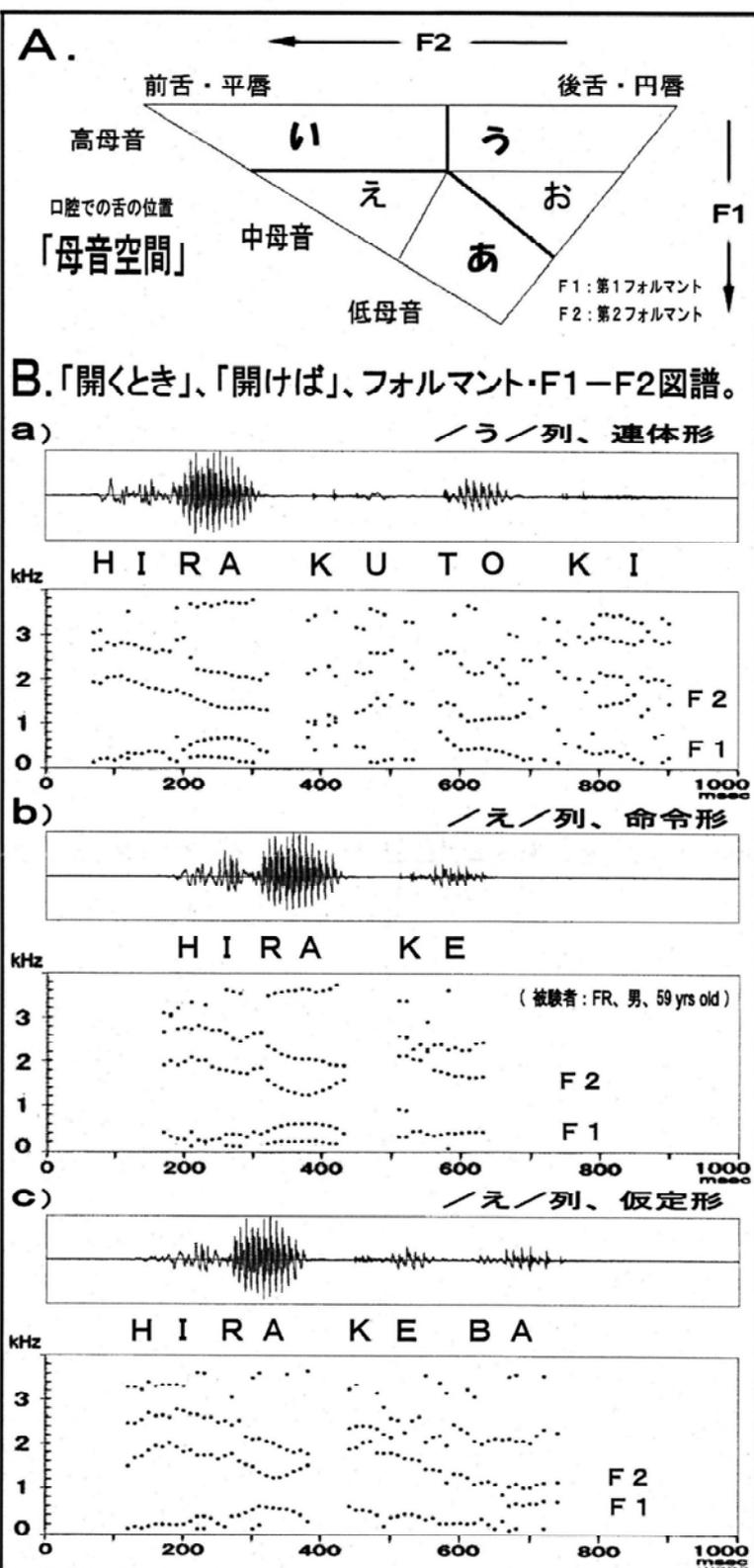
ヒラコ：／と発音したのです。／あ／と／い／でも同じで、縮合して／え／と発音する場合があります。有名なのはフランス語の綴り字／ai／で、例えば、航空会社、「エール

盛り上げ点を座標にしたものです。横軸が前舌・平唇から後舌・円唇の度合い、縦軸が盛り上げ度の高低です。これらは共鳴周波数（フォルマント）第 1、第 2 に関係し、後者、縦軸の高低が同・第 1 (F1)、前者、横軸の前後位置が同・第 2 (F2) のあり方を決めています。

・フランセ」の／エ／がそれです。これらは、母音のなかで、／あ／、／い／、／う／が基本で、他はその派生の位置にあることを示しています。今回は、日本語の／え／をめぐって話したいと思います。／う／の特徴を理解することが鍵になります。

／う／、中寄りの効果：舌の位置が前に寄り、中央に近づいた分、共鳴周波数・第 2 は引き上げられます。これは、体言への接続に好都合です。図 B の a)、／HIRAKUTOKI／の／う／。共鳴・第 2 の高さに、／とき／への接続準備が読み取れます。同・第 1 は、／い／に次ぐ二番目の低さで、終止感に最適です。

／え／に含まれた／い／と／あ／：／う／を基準に舌を後ろにすれば／お／、前に移せば／え／です。／う／が中央に寄った分、発音は楽です。／い／に近い／e／でも、／あ／に近い／e／でもない、両者の中間がその収束点です。これにより、／え／は、／い／と／あ／の特徴を自然に取り入れることになりました。一つは、共鳴間隔 (F1-F2) が最大の／い／に次いで広いということ。他は、基本となる共鳴・第 1 が最も高い／あ／に次いで高いということ。図 B-b)、／HIRAKE／の／え／では、前者の共鳴間隔で、命令形に必要な明解さが読み取れます。同・c)、／HIRAKEBA／の／え／では、後者の共鳴周波数・第 1 で、／BA／の／あ／に向けて、音高を一段低く準備している点に、仮定形に必要な韻律への貢献が読み取れます。



日本語の／う／：他言語での／う／は、唇を円く窄め、舌を後方で盛り上げ発音するのが一般的です。日本語では、唇を顕著に円く窄めません。その分、／う／は平唇化し、舌の盛り上げは、前方に移動しました。

「母音三角形」：図 A は、構音時の舌の位置、